

イスパニア会 会報第4号

目次

会長挨拶	西川 喬
神戸外大設立 70 周年	野村 竜仁
	福寫 教隆
エッセイ	木村 榮一
海外生活	池澤 英一
海外便り	形岡 忍
海外派遣経験	谷口 理沙
海外便り(新聞記事)	土屋 寛子
卒業してから	江副 勇次
	中澤 純一
	竹入 舞
現在のイスパニア学科	成田 瑞穂
ラテンアメリカフォーラム	谷 善三
学生の海外体験記	木村 賢弘
語劇祭	清水 悠祐
同期会	伊藤 明
新旧学舎	杉井 皓一
近況報告	14 名
理事名簿	イスパニア会理事会
原稿「近況報告」執筆要項	会報編集委員会
編集後記	田岡 敬造

会長挨拶

西川 喬

1969年（昭和44年）卒

本学は、2016年に創立70周年を迎えた。1946年に神戸市立外事専門学校が設立され、その3年後に大学に昇格したのだが、外事専門学校の設立から実に70年の時が経過したことになる。この間に、夜間の第2部英米学科、イスパニア学科、国際関係学科の新設があり、また大学院博士課程が設置された。2007年には、他の国立・公立大学と同様に、地方独立行政法人へ移行した。さらに、記念の年である本年は、本学において日本で初めての国連模擬世界大会が開催され、世界各国から350名もの学生が集まった。神戸国際会議場なども会場にして、活発な議論が交わされ、世界大会は成功裏に終わった。

しかし、こうして大学が発展していく中で、学舎の移転や阪神・淡路大震災なども経験することになる。特に、この大震災では新学舎移転後のことでもあり、建物の被害は軽微であったため、大学は被災地への物資補給基地として機能した。

さて、イスパニア学科は、1962年（昭和37年）に設立された。中南米との貿易の必要性から、神戸の実業界からの要請が強かった、という話を聞いたことがある。いずれにせよ、新しい学科の設立は、大変な労力が必要とされるものだ。学科設立までは、林一郎先生が兼修語学としてスペイン語を教えておられた。林先生から設立当時の状況などをよく聞かされたものだが、先生が一番腐心されたのは、いかに優秀な教授陣をそろえるか、ということだった。このため、日本のスペイン語界で第一人者とされていた高橋正武先生のもとへ何度も足を運んだそうだ。高橋先生は、当時、本格的な辞書として『スペイン語辞典』を一人で編纂された人物である。「一人で」とわざわざ書いたのは、昨今の辞典編纂は何人かの協力で行われるのが普通だからだ。先般、白水社から発刊された『スペイン語大辞典』は、監修者と執筆者は40名近くにもなる。

話をイスパニア学科設立に戻せば、4年が経過した1965年には全学年の学生が在籍するのだが、その数年後には、高橋正武、一色忠良、林一郎、鼓直、木村榮一、ペニユエラという一流のスペイン語教授陣が本学のイスパニア学科に揃っていた。さらには、その後には、東谷穎人先生もいらっしやった。日本のスペイン語学科でもトップクラスの教授陣といえるかもしれない。

ただし、辞典に関しては、高橋先生の「スペイン語辞典」が唯一実用になるものではあったが、スペイン語で書かれた文学書や歴史書などを読み込むには、語彙数や例文などが足りなかった。やがて時が経つにつれ、複数の辞書が出版されて、参考書なども充実していくことになる。

語学教育に必須なオーディオ・ビジュアルを使った教育では、神戸外大はいつも他の外国語系の大学の先端を走っていたと言える。まだオープンリールが主流だった1960年代、すでに大学にはボックス形のオーディオルームが存在していた。私はアルバレス先生からこの教室でオープンリールを使ったスペイン語の聞き取り授業を受けたが、その「現代的な」設備に驚いたことを覚えている。

やがて、学園都市に移転すると、当時では最先端のオーディオ・ビジュアル教室（通称AV教室）も設置された。その時には、私もスペイン語を教える側になっていたので、この教室はよく使ったものだ。冷暖房の効いた快適な教室だった。移転した1986年当時は、バブルの時代で、たぶん予算も潤沢にあったのだろう、キーボードに打ち込んだ文字が黒板代りのボードに表示できるワープロなども導入されていた。数台で数百万円かかったという代物で、当時は珍しい、スペイン語のアクセントやñが打てた。だが、こうした機器は変遷も激しくて、やがて全ての機器が陳腐化し、次々と新しいものに取り換えられていった。

70年と言えば、人間にたとえると、古希にあたる。少しばかり年齢にふさわしく落ち着いて振り返ってみると、改めて思うのは、何かを習得するのは、機械や機器の新しさではなく、学習する人の意欲や好奇心などという目に見えないもののほうがもっと重要だ、と思うようになってきた。新しい機器はもちろん利用していいのだが、やはり人の心に繋がるもののほうがもっと大切なのだという気がする。

本学のさらなる発展を願ってやまない。

神戸外大設立 70 周年

外大 70 周年記念事業について

野村 竜仁

1992 年（平成 4 年）卒

2016 年神戸市外国語大学は創立 70 周年を迎え、節目の年を記念するさまざまな取り組みが行われました。たとえば創立 70 周年記念事業のための、以下のようなロゴマークが制定されました。



このロゴマークは 2015 年に制定され、大学のパンフレットなどあちこちで用いられていたもので、ご覧になった方も多いかと思います。

70 周年に合わせて、記念誌も編纂されました。2014 年から着々と準備が進められ、136 頁という大部なものができあがりました。大学全体や学科・グループ毎の沿革や現状のほか、かつて教鞭を執られた先生方の人物紹介の頁などもあり、イスパニア学科の関連では林一郎先生と木村榮一先生がご紹介されています（創立 70 周年記念誌、76 頁）。この記念誌のほかに、大学の紀要である「神戸外大論叢」も、創立 70 周年記念号として今年度発行される予定です。

施設面では、70 周年を契機として第二学舎の増築が行われました。一部の教室はアクティブラーニングにも対応できるようになり、またキャリアサポートセンターやボランティアコーナーが同学舎内に移設され、学生の利便性の向上が図られました。増築に伴い、学生の多様な学修をサポートする「スチューデントcommons」が新たに設置されました。電子黒板やパソコン、プレゼンテーションルームやスピーキングルームなどが備わっており、発表や討論の準備演習を行うこともできます。

施設面での事業のほか、卒業生の荻野正明氏の篤志による荻野スカラシップなど留学支援奨学金等の拡充も図られました。同じく 70 周年を契機として地域連携推進センターが設置されました。同センターが地域貢献・地域連携活動を

推進する総合窓口となり、神戸市外国語大学における教育研究の成果を地域社会へ還元する取り組みが推進されています。

行事としては、まず2016年6月4日に創立70周年記念式典と講演会が開催され、「ホームカミングデイ」「世界のボードゲーム」「図書のリユース会」「モザイクアート完成披露」等の催しもありました。式典では関係各所から来賓を迎え、イスパニア学科の関連では、東京のスペイン大使館からサンティアゴ・エレロ文化参事官にお越しいただきました。余談ですが、当初は駐日スペイン大使にご列席いただくことになっておりましたが、ご予定が合わず、ご参加いただけませんでした。しかしながら、イスパニア学科の福畠教隆先生、モンセラット・サンス先生のご尽力により、改めて2016年12月5日に駐日スペイン大使ゴンサロ・デ・ベニト氏をお迎えし、ご講演を賜ることができました。

そのほか、記念事業の行事としては以下のようなものが開催されました。

- ・神戸市外国語大学卒の現役教員同窓会（2016年8月21日）
- ・芥川賞作家小川洋子氏と、著名な翻訳家で本学客員教授でもある柴田元幸氏による朗読会（2016年10月8日）
- ・模擬国連世界大会（2016年11月23日）

また企画展として、以下のような催しもありました。

- ・パネル展示「神戸市外国語大学70年の歩み」（2016年1月29日～3月18日、2016年3月22日～12月22日）
- ・日本の国連加盟60周年記念「日本と国連の歩み」写真展（2016年9月26日～10月14日）

こうした事業のほかに、2016年に神戸市外国語大学の教員が誘致・開催した学会等も、70周年冠事業として実施されました。冠事業には以下のようなものがありました。

- ・小学校英語教育学会近畿ブロックセミナー（2016年1月24日）
- ・日本英語学会（2016年4月23日、24日）
- ・中国近世語学会（2016年5月28日）
- ・日本南アジア学会（2016年9月24日、25日）
- ・日本イスパニヤ学会（2016年10月1日、2日）

- ・イギリス・ロマン派学会（2016年10月29日、30日）
- ・大学英語教育学会第21回オーラルコミュニケーション・フェスティバル（2016年12月10日）
- ・日本英文学会関西支部（2016年12月17日）

このうち日本イスパニヤ学会の第62回大会では、イスパニア学科で長く教鞭を執られ、学長として大学の運営にも尽力された東谷穎人先生と木村榮一先生による記念講演が行われました。東谷先生は「私のスペイン文学読書遍歴」、木村先生は「ラテンアメリカ文学との出会い」というタイトルでお話をされました。

同じく70周年冠事業として、モンセラット・サンス先生の研究室が中心となり、以下のような企画も実施されています。

- ・高校生向けスペイン語集中講座（2016年3月10日～3月30日）
- ・シニア向けスペイン語講座（2016年4月13日～7月27日）
- ・第1回全国シニア向けスペイン語弁論大会（2016年11月2日）

以上、外大70周年記念事業についてのご報告でした。

神戸外大設立 70 周年

市民講座「スペイン語で巡る世界遺産の旅」

神戸市外国語大学教授

福嶋 教隆



イスパニア会の皆さん、こんにちは。皆さんの中には、外大で毎年開かれている「市民講座」に参加されたことのある方も多いかと思います。1971年度の第1回「世界の国々」を皮切りに、今回で44年目を迎えました。今年度は、イスパニア学科の当番になり、テーマや講師の選定を学科でおこなうことになりました。

そこで、学科の教員スタッフ一同で検討した結果、次のようなプランをたてて実施しました（以下、表の中では敬称は略します）。

総合テーマ：スペイン語で巡る世界遺産の旅

第1回（2016年9月28日（水））：福嶋教隆「スペイン語圏の世界遺産概観」、川口正通「古代メキシコから近代バルセロナまで」、於ユニティ第4セミナー室（神戸研究学園都市大学利用施設）。

第2回（10月8日（土））：宮本正美「世界遺産を通して学ぶスペイン語の発音講座」、於神戸外大502教室。

第3回（10月12日（水））：西川喬「トレド 一時間の迷宮に迷い込む」、於神戸外大504教室。

第4回（10月15日（土））：Juan Romero「スペイン語圏の映画文化遺産 ―ブニュエルとアルモドバル」、於神戸外大502教室。

第5回（10月19日（水））：野村竜仁「アルカラ大学とセルバンテス」、於神戸外大504教室。

第6回（10月22日（土））：吉田浩美「バスク地方の世界遺産と食文化」、於ユニティ第4セミナー室。

第7回(10月26日(水)):成田瑞穂「ラテンアメリカ文学とスペイン語圏の世界遺産」, 於神戸外大504教室。

第8回(11月2日(水)):Montserrat Sanz「セゴビア —共存する3つの文化」, 於神戸外大504教室。

このように、「スペイン語で巡る世界遺産の旅 (Viaje por los Patrimonios de la Humanidad del español)」という総合テーマを設けて、9人の講師が手分けして、スペイン語圏の世界遺産に関連する話題について話しました。講師は、ごらんのとおり、西川名誉教授、宮本名誉教授、専任スタッフ6人と吉田客員研究員という陣容です。第1回は概論で、第2回からは語学、文学、思想、映画、歴史、文化などを取り上げました。

本来は第2回(10月5日(水))の予定だったSanz先生の講座が、当日、台風で暴風警報が発令されたため、11月2日に延期になった以外は、アクシデントもなく、無事に全日程を終了しました。

また、ちょうどこの市民講座の期間に含まれる10月1日(土)・2日(日)に、神戸外大が日本イスパニヤ学会第62回大会の会場となり、その記念講演を東谷名誉教授・元学長と木村名誉教授・前学長に担当していただきました。

日本イスパニヤ学会第62回大会記念講演

2016年10月1日(土), 於神戸外大大ホール

1. 東谷穎人: 私のスペイン文学読書遍歴 (司会: 野村竜仁)
2. 木村榮一: ラテンアメリカ文学との出会い (司会: 成田瑞穂)

この記念講演は、学会の会員だけでなく、一般の人にもオープンにしたので、非常に多くの聴衆が参加し、東谷先生、木村先生の警咳に接することができました。イスパニア会の皆さんの顔もたくさんお見かけしました。

このように、市民講座は学会記念講演とのコラボ開催として実施され、神戸外大イスパニア学科の総力をあげた催しとなりました。その結果、市民講座の受講者は総計のべ812人、つまり1回平均100人強という盛況で、市民講座始まって以来の大記録を打ち立てました。



西川先生（第3回）の講座は、特に好評でした

受講者の男女比は半々で、やや女性が多めです。全体の4割が60歳代の方でした。神戸市内の方が大半ですが、市外、他府県の方も計14%いました。イスパニア学科の在学生、卒業生も多数おられました。受講の目的は「教養を高めるため」という人が最も多く、受講してみて、レベルは「ちょうどよい」、内容に「満足した」がどちらも7割強という結果

で、講師一同、胸をなでおろしました。

受講者の皆さんは非常に熱心で、毎回講師への鋭い質問が相次ぎました。また、スペイン語圏に行ったことのある人、住んだことのある人、スペイン語をよくご存じの人も多く、知識も学習意欲も豊かで、講師がたじたじとなるほどでした。むしろ講師の私たちが教えられることが多かったように感じます。中には講義のしかたや教室の設備について、アンケートで忌憚のない意見を寄せられた方もあり、それも含めて開催側にとって非常に勉強になりました。



今回の市民講座の成功の原因は、講師陣と、受講者の皆さんとの双方に、イスパニア学科の創設以来の「良きチームワーク」と、「常に高みを目指そうとする向上心」の伝統が作用した結果だと思えます。ご参加下さったイスパニア会の皆さん、ありがとうございました。今後、またこのような企画がありましたら、ぜひ皆さんのご参加をお待ちしています。

エッセイ

ラテンアメリカ文学との出会い

木村 榮一

1966年（昭和41年）卒

神戸市外国語大学 前学長

人生を決定づけるのは運と縁、つまり出会いだとよく言われるが、ぼくの場合がまさにそうだった。大学に残って数年間はスペインの二十世紀はじめに活躍した九十八年代の作家を中心に研究をしていたが、そのうち行き詰って出口の見えない状況に追い込まれてしまった。そこへ大学紛争が起こり、研究も思うように進まないこともあって、他の仕事に就こうかと思ったが、たまたま一人のメキシコ人が大学へ遊びに来た。ラウルという名前のそのメキシコ人と親しくなって、文学の話をしていて悩みを打ち明けると、彼がカバンから一冊の本を取り出し、これを君にあげるからだまされたと思って読んでみろと強くいった。それがアルゼンチンのフリオ・コルタサルの“Rayuela”『石蹴り遊び』という小説だった。

本を開いて、「ラ・マガに会えるだろうか」という最初の一行に出会った時、このような書き出しの小説に出会ったことがなかったこともあり、実に新鮮な衝撃を受け、まるで憑かれたようにあの作品を読み、ひたすらノートをとった。以後、コルタサルのほかの作品も読みたくなり、小説、エッセイ、短編集と次々に読んでいったが、ようやく自分の探している作家に出会えた思いがして、方向が定まった。ラウル君からあの小説を紹介してもらえなかったら、今でも迷い続けていたかもしれない。

当時はちょうどラテンアメリカ文学《ブーム》の時代で、世界的に注目されはじめた時期にあたり、コルタサルもそのひとりだということを知った。神戸外大時代の恩師である鼓直先生がガブリエル・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』を訳されて、大きな反響を呼んだのもこの頃のことである。篠田一士の評論で《ブーム》の作家たちが紹介されはじめたこともあり、以後コルタサルはもちろん、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、ガルシア＝マルケス、マリオ・バルガス＝リョサ、ホセ・ドノソ、カルロス・フエンテス、オクタビオ・パスなどの作品に出会うことができた。

当時、たまたま書店で手に取った篠田一士の文芸評論『邯鄲にて』に触発さ

れて無謀にもボルヘスの作品に挑戦してみたが、手も足も出ず、すごすご本を閉じた苦い思い出がある。しかし、いずれボルヘスのものは必ず読んでやると心に決めた。のちに彼の作品はぼくの大切な愛読書になったのだから、人生は分からないものである。途方もない博識家のボルヘスは、その該博な知識を駆使しながら、それを遊び、幻想の種にするので、ついていくにはかなりの知的体力がいり、やはり経験と年齢が必要なのだとのちに思い知らされた。

メキシコに留学したのはその頃のこと、向こうではパスをはじめ、フアン・ルルフォ、カルロス・フエンテスなどの作品を読み漁った。帰国する前に、バルガス=リョサの『緑の家』の翻訳を依頼されて、さっそく読みはじめたが、いくつものストーリーが交錯している上に部分部分がジグゾー・パズルの断片のようにバラバラになっていて途中で訳が分からなくなり頭を抱えた。帰国後、英訳の助けを借りて少しずつ読み解いて訳を進めたが、人物関係がきちんと読み取れないだけでなく、ころころ変わる場面転換についていけず、何がどうなっているのかよく分からなくて、訳すのにひどく苦労した。何とか最初の数十ページを訳して送ったところ、しばらくして編集者の手で真っ赤に訂正された原稿が送り返されてきた時は天を仰いだ。しばらくの間筆を執ることができないほどのショックを受けたが、ここでやめればすべてが終わってしまうと考えて、なんとか食らいついて訳を進めた。そのうち、全体像が見えはじめ俄然訳が楽しくなってきた。『緑の家』を訳したおかげで、バルガス=リョサの『都会と犬ども』、『世界終末戦争』などの作品に出会えたのは大きな喜びだった。

その後も、チリのホセ・ドノソの『夜のみだらな鳥』、『別荘』、『ブルジョワ小説三篇』、マヌエル・プイグの『蜘蛛女のキス』、あるいはイサベル・アジェンデの『精霊たちの家』、『エバ・ルーナのお話』など、次々にわくわくするような小説に出会えたのは幸運であった。

小説とは別に、ボルヘスの短編集『伝奇集』や『エル・アレフ』、あるいはエッセイ集『続・審問』やオクタビオ・パスの詩論、文明論である『交流』、『孤独の迷宮』、『弓と豎琴』などには大いに触発された。

神戸外大がスペインの大学と提携を結んで日本語講座を開くことになり、四年、ないしは五年に一度最初はトレードで、その後はアルカラー大学で日本語を教えることになった。アルカラー時代のことだが、学期の終わりに外国語の教師が集まってささやかなパーティを開くことになり、出かけて行った。そこでハンガリー語の先生マルタさんに出会った。いかにも東欧の農婦といった感じのがっしりした体形のマルタさんは、ウォッカをまるで水のようにぐびぐび飲みながら、「キムラ、あなたはラテンアメリカ文学専攻らしいけど、スペイン

にもすごい作家がいるわよ。だまされたと思って一度フリオ・リヤマサーレスの小説『黄色い雨』を読んでごらんなさい。本当にすごい本だから」と勧められた。早速手に入れて読みはじめたが、素晴らしい小説で、魂の奥底から揺さぶられるような感動を覚えた。リヤマサーレスは寡作な作家だが、短編も小説もそれぞれに味わい深いものがあつた。

その後、イタリア文学の研究者と雑談している時に、スペインのカタルーニャ出身の作家で、エンリーケ・ビラ=マタスという人がいるんですが、イタリアのアントニオ・タブッキが絶賛しているので、一度読んでみられるといいですよと言われて、すぐに『バートルビーと仲間たち』や『モンターノの病気』、『パリに終わりは来ない』などを取り寄せたが、この作家のものも非常に面白く読むことができた。

以上のようにこれまでぼくはひよんな出会いや人から勧められた本を読んで、素晴らしい文学作品に出会ってきたが、この年になってしみじみ運と縁、この上ない出会いのおかげで文学の森ですばらしい果実を手にする事ができたと、改めて実感している。

海外生活

私の海外勤務とその体験から得たもの

池澤 英一

1969年（昭和44年）卒

私は昭和44年（1969年）にイスパニア学科を卒業し、松下電器貿易（株）に入社した。この会社は当時の松下グループの生産する製品を輸出するための会社で、私は中南米部に配属された。入社して8年後の昭和52年（1977年）に念願の海外勤務のチャンスが巡って来て、中米エル・サルバドールにある現地法人 **Panasonic de El Salvador** 社の経営責任者として赴任した。

この後、コスタリカ、コロンビアに転勤し、合計約8年の中南米勤務の経験をした。また日本に一旦帰国後二度目の海外経験としてカナダの **Panasonic of Canada** に赴任し、そこで約6年勤務した。

エル・サルバドールは初めての海外勤務をした国であり、その意味で私にとって非常に印象深い国であること、そしてその国では決して忘れることのできないユニークな経験をしたので、そのことを述べてみたいと思う。

1. サン・サルバドール空港の入国審査

空港での入国審査で、係官が私のパスポートを見ながら「あなたは日本人か？あの白人国のロシアを破ったのは素晴らしい。東洋の非白人の小国が良くやった。」などと誉めそやし私に握手を求め、荷物検査はいいからと言って気持ちよく通してくれた。この時初めて彼らエル・サルバドールの一般の人々が長年スペイン人の支配下に置かれ、独立後も欧米の大資本に搾取され惨めな生活を強いられてきたため、胸の内に欧米人に対する根強い反感を抱いていることを知った。このためか、この国は親日家が多く、仕事が非常にやり易かった。

2. 階級社会

着任してまだ日も浅い頃、事務所の私のオフィスで現地人社員と会議をした後、デスクの上や床に、会議で使用した資料や紙くずが多少散在していたので、私がそれを拾っていると、番頭格の現地人が飛んできて、それは社長のものではない、誰かにやらせるべきだ、云々と注意してくれた。そん

なところを見られたら、社長の権威が落ちるし、お里が知れるということらしい。

それから、この国の社会を注意深く観察すると、アチコチにこの国（に限らず、外国では）出自、人種、学歴、資産、社会的地位などによる厳しい階級社会が存在することがわかった。

次の項に出てくるが、この国の治安が悪化したので、コスタリカの事務所の一部を借りて、そこからエル・サルバドールの遠隔経営をすることになった。いわば居候をさせてもらったのであるが、エル・サルバドールでは一応社長であるので、対面を保つためコスタリカ事務所の中に別途社長室を作ってもらった。

3. 共産ゲリラの誘拐事件

中南米にほぼ共通しているのは貧富の差が激しいことである。ほんの一部の特権階級が政治・経済・司法などの社会システムをコントロールしておりその差は今も一向に縮小される気配はないようだ。

当時、エル・サルバドールでは不満分子がキューバの援助を受けてゲリラ活動を行っていたため治安が極端に悪化していた。欧米の大資本の現地法人の責任者が次々に誘拐され、身代金を要求されていた。オランダのフィリップ社、フランスのミシュラン社、アメリカのGE、イギリスのロンドン&モントリオール銀行などである。

そのうち日本企業も狙われるのではないかということで、本社（大阪）から十分気を付けるようにとの指示があり、対策を検討した結果、銃で武装したガードマン二人を車に乗せ一人は前方、もう一人は後方を見張らせる。通勤ルートと出勤、退社時間を毎日変えるなどの対策を実施した。道路を歩く現地の人や前後を走る車がゲリラに思え、随分と緊張して運転した。

そんな状況の中、日本の大手商社の責任者が退社時に待ち構えていたゲリラに誘拐された。

この事件の後、日系企業のほとんどの日本人社員はエル・サルバドールを離れグアテマラ、コスタリカなど近隣諸国に避難した。私も他の日本人の同僚とともにコスタリカに避難、そこでしばらく事態の推移を見ることになった。しかし誘拐された日本の商社の責任者はその後、ゲリラとの懸命の人質解放交渉にも拘わらず、死体で発見された。

状況が悪化する中、欧米・日系の企業は撤退あるいは事業規模の縮小を始めた。これがさらなる失業者の増大と治安の悪化を招いた。当社は コスタ

リカの現地法人 Panasonic de Costa Rica の協力を得て、そこからエル・サルバドールのオフィスの遠隔経営を始めることになった。現地人従業員に日常の業務を任せることに少し不安があったが、やらせてみる事にした。時には会社の経営状況をチェックするためコスタリカからエル・サルバドールのオフィスに出向いたが、その時は安全を期して敢えて事前に通知しなかった。オフィスに顔を出すと従業員はびっくりして駆け寄ってきて、道中大丈夫だったかなどと心配してくれた。社内の各部門を回ったり、報告を受けたりしたが、当初の心配とは逆に一生懸命働いてくれていた。当社だけは、誰一人解雇することなくそのまま事業を続けたので当社に対する信頼が増し、モラルの向上につながったのであろう。そして従業員との絆も強くなっていった。人を信頼し任せると任された人は奮発して頑張るものだという事を身をもって体験した。

オフィスに出たある日、大手商社の日本人が犠牲になったことに対し、現地人の幹部社員数人が私のオフィスに来て、今回の悲劇に対し心からお悔やみ申し上げる、エル・サルバドール人として同胞が日本人に危害を加えたことを申し訳なく思うと、すまなさそうに言ってくれた。たぶん空港の入国審査官のように彼らも胸の奥に日本と日本人に対する特別な思いを抱いていてくれたのだろう。その時私の胸も熱くなった。

4. 腸チフス事件

当国は赤道近くにあり一年中暑い。またレストランなどの衛生管理も良くないので、水や食べ物には十分気を付けなければならない。日本から新しく赴任してきた若い技術者が、現地人従業員と休日に海に遊びに行つてその屋台で何か海産物を食べた翌日オフィスに出勤してきたが、40度前後の高熱がありフラフラしていた。これはただ事ではないと思い、すぐ病院に行かせた。病院の先生から電話があり、腸チフスの可能性があるのですぐ来てほしいとの事。

先生が言われるには、検査の結果がでるまでは断定できないが、症状から見ても腸チフスであろう。でも心配する必要はない、この国では珍しい病気ではない、今も何人かの患者が入院している。彼もすぐ良くなるだろう、との事だった。検査の結果やはり真正の腸チフスと判明した。日本の本社にも報告をしておいたが治療の効果は見受けられず先生も首をかしげるばかり。日本人は腸チフスなどの菌に対する免疫がないので現地人と比べ抵抗力が弱いのが原因かもと分析していたがそのうち容態が悪化し腸から出血が

始まった。医者は輸血が必要と言うので、エル・サルバドールの在留邦人の皆さん、現地人従業員やその家族から適合する血液を頂いて輸血をする一方、万が一に備え、九州からご両親を呼んだ。

医者は自信を失い、自分が勉強したヒューストン（米国）の病院なら熱帯性病原菌の感染症専門医がいるのでそこなら最高度の治療が受けられると言い出した。そこで本社に相談し、PANASONIC USA（アメリカ松下）の協力も得て、ヒューストンの病院から医療専用機をチャーターしてエル・サルバドール空港に来てもらった。機内には緊急事態に備えて手術も行える設備があり、医者、看護婦が同乗、あと家族一名のスペースがあり、お母さんに乗ってもらった。私とお父さんは別途民間機でヒューストンに向かった。

チャーター機がヒューストンに着くと待ち構えていた救急車に乗り（一切の入国手続きなしで）そのまま病院に搬送された。私たちが病院に着くとしばらくして集中治療室から担当医が現れ、患者の容態や検査データなどから、「彼は助かるよ、安心して」と言ってくれた。その後約一か月入院して彼は退院できた。

この腸チフス騒ぎで、私が驚いたことは、当時の米国の医療水準の高さとジェット機での緊急医療体制が完備されていたことである。また、エル・サルバドールでの献血で感じたことは、在留日本人の強い仲間意識である。遠くに住んでおられる方もわざわざ駆けつけて下さった。そして現地従業員とその家族や親せきの方までもが、「私の血液が役に立つなら喜んで・・・」と献血下さったことに感激した。これも彼らの中に、日本と日本人に対する親日感情があったからではなかろうか？ もし患者が欧米人（白人）であったらどうであったろうか？

5. 日本と日本人について

短い間だったが、エル・サルバドールの人々とのお付き合いから気づかされたことは自分が日本人でありながらほとんど日本と日本人のことを知らなかったということだ。「灯台下暗し」と言うが、海外に出て初めて日本と日本人すなわち日本文化のすばらしさを認識した。これが契機となり日本と日本人についてもっと知りたいと思うようになった。

目下、日本では外国からの観光客と日本への移住者が増加したためか、「クール ジャパン」などと呼ばれる番組などで外国人から見た日本文化の良さが取り上げられるようになり、いままで当たり前のこととっていたことが、彼らにとっては信じられないくらいクールであることが紹介されてい

る。これにより日本人も日本の文化のすばらしさを認識し始めてきたことは喜ばしい。

これらの番組では日本と日本人について、治安の良さ、街や道路の清潔さ、繊細な感性、親切、誠実、時間厳守、日本食、茶道、華道、武道（空手、柔道、剣道、弓道など）座禅、歌舞伎、陶磁器、漆器、アニメ、日本旅館・温泉、カプセルホテルなどが取り上げられている。だが残念なことに、それは個々の現象をバラバラにとりあげているだけで、それに共通しているもの、根底にあるものに言及していない。

私は、日本文化の基礎をなすものはその精神性にあると思っている。例えば武道では勝ち負けよりも、礼儀、所作、技の美しさ、正々堂々たる態度、敗者に対する思いやりなどが重んじられる。要は人間性を磨き高めることが狙いと思う。茶道もまた礼儀、作法はもちろん、茶室という空間での亭主と客との一期一会の張りつめた独特の緊張感のなかで知性、教養や人間・自然に対する深い洞察力や精神性が求められた。

文化というものは一朝一夕にできるものではない。長い歴史を経てその中でじっくり熟成された結果であろう。日本は単一民族で、国として世界で最も長い歴史を持ち、四方を海で囲まれていたので外国に攻め込まれず独立を保ち、平安時代（約 390 年）や江戸時代（約 250 年）に代表されるように平和な時代が長く続いた国である。一方、欧州やアジアでは陸続きだったので領土、宗教、民族などを巡って、血で血を洗う戦争の絶えない時代が長く続いた。この歴史的時代背景の違いが欧米・アジアと日本文化の違いとなって現在に至っているのではないか。秋の虫の声は、外国人にとっては単なる雑音としか感じないが日本人は、過ぎゆく秋を惜しみ何かさみしさを感じる、とよく言われるが、日本人にはこのような DNA が引き継がれているのかも知れない。いずれにせよ、エル・サルバドルでの体験が日本は高い精神性を持った素晴らしい文化をもつ国であることを深く認識させてくれた。

若い外大生諸君には、日本の歴史や文化をよく勉強し、日本人であることに誇りを持って活躍して頂きたい。

海外便り

コロンビアに駐在して

形岡 忍

1977年（昭和52年）卒

神戸外大同窓会の皆様、この度は会報に寄稿する機会をお与え頂きありがとうございます。現在62歳になりますが、まだ南米コロンビア共和国にて現役で働いております。昔話めいた取り留めのない事柄を書き進めますが、何卒ご容赦の程お願い致します。

皆さま、コロンビアと聞くと何を想像されますか。コーヒーぐらいは直ぐに思い浮かぶかも。他には、治安が良くない、ゲリラや麻薬組織が暗躍、と言ったぐらいでしょうか。馴染みもないし何処に在るかも定かでないので、あまりイメージは湧かないかも。しかしスペインア学科出身の方なら、かのノーベル賞作家ガブリエル・ガルシア・マルケスを思い出して頂けるかもしれません。またノーベル賞と言えば、何と2016年の平和賞にコロンビア大統領の受賞が決まった、とのニュースが先般世界中を駆け巡り、この国が一瞬なりとも注目された年でもありました。

さて、私事に話を移しますが、昭和52年スペインア学科卒業後、縁もゆかりもなかった浜松に行きスズキに就職。昭和55年（1980年）にはコロンビア共和国のペレイラというアンデス山中の田舎町に駐在を命ぜられ、そこでオートバイの組立・販売に従事して来ました。アンデスと言えば、南米大陸を縦断する海拔5千M級の大きな山脈ですが、その広さたるやコロンビアに在る山並みだけで日本がすっぽり収まるほどの広大な地域です。

ひとまず宿舎代わりに入ったホテル。町の中心街（セントロ）にあり、いかにもビンテージもので昔の映画に出て来そうな感じ。兎に角古臭いし天井は高い、床も壁も板張り、エレベーターも格子の扉で囲われ、やはり仏映画か西部劇（にはエレベーターは無いが）の世界。その日はそのまま寝ましたが、翌朝まだ日の出前なのに窓の外ではけたたましい蹄の音がしてうるさい。これが毎日続くのか、と初日から思い知らされました。

よく見ると、荷馬車が十数台あちこち行き交い、中には幌付きもあれば馬だけで颯爽と駆けて行く人もいる。カーボーイハットを被り防寒用のポンチョを肩から掛け、拳銃がない以外は映画にあるような出立ち、クリント・イーストウッド並みにカッコ良いとは言えませんが、あゝやっぱり西部劇の世界かと感

じ入りました。今ではそんな光景は余程の田舎でしか見かけなくなりましたが、それでもこの国の人達は朝が早いままですね。

今では想像もつきませんが、その頃のペレイラという町は、電話は殆ど無いし在っても市外はなかなか繋がらない、国際通話は諦めて手紙にするしかない。街を歩けば信号も無い、しかし昼間からやたらと人通りだけは多い。暇潰しでブラついているのは見て取れるから、此処の人達は仕事がないのか。スーパーに行っても食料・日用品とも品揃えは乏しく品質も今一つ、赴任早々貧乏国とはこんなものかと実感させられました。

当時は海を知らない人も多く魚介類と言えば、ナマズやティラピア（最近はいづみ鯛と言うらしいですね。）の川魚のみ。ハッキリ言って不味い。代わりにアボカド（スペイン語でアグアカテ）をスライスして、目を瞑ったらトロの刺身かな、と言って食べました。そんな話を本社でしたら、「カリフォルニア巻きみたい。美味しいだろう。」と言われ、初めてそんな寿司があるのを知ったのも随分前。「アホ、そんなん食べて美味しい訳ないやろ！」

自慢話にもなりません、大豆は沢山あるので薬屋でニガリを買って来て豆腐を作る、パン用のメリケン粉が手に入ればうどんを打つ、小豆はないが似た色の豆はあるので粒あんにしてタロイモ粉で饅頭を作る、豚骨・チキンで出汁を取り細麺スパゲッティを入れてラーメン、コーヒーを薄く出して麦茶代わり等々、その頃は人間いろいろ考えるものやな、と我ながら感心しましたが、今から思うと豆腐以外は美味しくなかったですね。

それからもう一つ、日本食料品は本当に貴重でした。自分で持って来たり出張者が持って来てくれたりでしたが、大事に使うから賞味期限はどんどん過ぎて行く。中にはかなりヤバいのも有り、その時は自分の鼻と舌で勝負、と割り切りました。それでも不思議と腹をこわしたりはしなかったですね、賞味期限もあって無きようなものかも。無理には勧めませんが、少々のことなら皆さんも捨てずに食べたら？あくまで自己責任ですが。

閑話休題、話を戻しましょう。コロンビア国は人口 4,500 万、南米の入口で唯一太平洋と大西洋カリブに面しており、海岸地方、ジャングル地帯、アンデス地域に分けられるでしょうか。私が居るペレイラは海拔 1,400M、首都ボゴタは 2,600M、赤道直下で涼を求めて山岳部に町並みを形成したのは良く理解できます。リゾート海域のすぐ傍に万年雪の山、イグアナが居ればコンドルも棲み、ハイビスカスがあれば高山植物もある、ジャングルでゲリラが暴れても町では人々が普通に生活するような、敢えて言えば多様性があるかと。

しかし、我々オートバイ屋にはこの多様性を育んだアンデスの大きな高低差がクセ者。皆様も山登りをしたり飛行機に乗った時に経験される、例の耳鳴りや飲みかけのペットボトルが凹んだり膨らんだりする現象です。全て気圧の変化に拠るのですが、ガソリンに空気を混ぜて内燃させるエンジンにはマイナス。性能通りに動かすには、既定の空気の取込み量があることが前提なのに、海拔ゼロから三千M強も高度差があると、空気の量が変わり出力と燃費に大いに関係する。本当に高い所ではエンストもありです。

また、この多様性は風俗習慣にも影響し、ガブリエル・ガルシア・マルケスの小説にあるような昔ながらのゆったりした生活もあれば、其処から僅か数十分ほど足を延ばした所では人々が忙しく行き交う都会生活もある。いわば信仰と迷信の世界と、喧騒と先進の世界が隣り合わせみたいな所ですね。交通手段の発達していなかった昔は、隣町であっても間に山や谷があると、それが人の行き来を大きく妨げた、と言うことでしょうか。

そうは言っても此の地も大きく変貌しました。コーヒーや出稼ぎに頼っていた経済が、依然モノカルチャーとは言え中心が石油・鉱物資源、および他の産業に移ろうとしているのが見えます。中南米の中では地味で目立たぬし内戦も終わらぬ貧乏国ながら、それなりに地についての経済政策を堅持し、結果的にラテンの中で一番マトモな国の一つになっている。中央に優秀な政治家や官僚が居る途上国の模範例を見るような気がします。欧米に流れた優秀な人材が戻って来れば、更に発展の可能性もあるやも知れません。



斯くいう私は？と言えば、まさか同じ処で定年を迎えることになるとは夢にも思わぬまま過ぎてしまい、まだそのまま居座り続けています。その間に世界は大きく動き日本も変わりアンデスの片田舎も変わりましたが、自身の外見が古ぼけても気持ちは若いままです。それなりに刺激を受けているのか、或いは単に進歩がないだけかもしれませんが。

皆さま、特に若い方にですが、「これからは発展途上国が狙い目ですよ。若い国は元気がありますよ。」とだけ申し添えて、筆を置きたいと思います。長々となりましたが、ご一読頂き有難うございました。

海外派遣経験

メキシコ駐在の経験

谷口 里沙

2013年（平成25年）卒

日本の関西国際空港から米国経由でメキシコのアグアスカリエンテスへ降り立ったのは2015年4月上旬。メキシコでは乾燥地帯特有の少しパリッとした温かな空気が漂っていた。

現在、世界中の自動車メーカーの多くが生産拠点を海外に置き、そこから近隣諸国へ輸出を行っている。これまでアジア諸国での生産が主流だったが、近年中南米諸国の発展と賃金の低さから、主要生産拠点をメキシコへシフトする企業が増えている。ジェトロの2015年度の調査によると、世界の自動車生産国の中で、メキシコの2010年度年間生産台数は2,342千台だったが、2015年には3,565千台で約52.2%増となっている。日本の大手完成車メーカーも次々と工場の建設・生産を始めている。

私は2013年4月より独立系の自動車部品会社に勤務しており、先述の背景により数年前に立ち上げたメキシコのアグアスカリエンテス州にある支社で財務・経理の研修をする機会を得ることができた。研修前は別分野の部署におり、財務会計の知識がほとんどなかったため、研修では主に会社の資産を扱う固定資産の管理業務を通じて、財務会計の基礎知識や経営管理業務を学んだ。また、日本人駐在員も多く赴任していたため、通訳業務を通じてスペイン語の向上に努めると同時に他部門の業務に関わることができた。

研修期間中は主に会社の資産をまとめた固定資産台帳と設備投資に伴う投資の決済フローの整備に取り組んだ。特に台帳の整備は上司と共に作業を進めたが、大部分の作業を任せてもらえることになった。工場や生産ライン立ち上げの際、メキシコのIMMEXと呼ばれる国内生産力を向上させるための輸入促進プログラムを使って日本から設備導入をしていたが、そのプログラム制度改定に伴い、資産情報の補完が必要となり、工場内を歩き回って会社の資産を再度見て回る必要があった。その際、経理部以外の日本駐在員や現地スタッフに協力して頂き、他の部門の業務の一端を見学することができた。

工場を歩き回っている内に、日本本社に比べメキシコ支社では工場内を女性社員が半分以上を占めていることに気がついた。これは当社だけではなく、他の企業でも同様だ。これは、メキシコのシングルマザー率が非常に高いことが

起因しているが、家計への意識が高くかつ繊細さを持ち合わせた彼女達の丁寧で素早い仕事ぶりに日本人駐在員たちは舌を巻いており、工程の責任者にも女性が起用されていた。私が着任した頃の頃は日本人の女性が工場にいることが珍しく、最初は遠巻きに様子を見られていて、黙々と設備の写真を撮り続けていた私はしばらく「亡霊」と呼ばれていたようだが、何度か工場に足を運び、質問を繰り返すうちに彼女達から話しかけてくれるようになり、設備資産のことやメキシコの文化などを説明してくれるようになった。



普段は作業着を着ている彼女達もパーティーとなると大変身をする。会社の主催する「Posada」と呼ばれるクリスマスパーティーでは色とりどりのドレスに身を包み、女優さながらの化粧と威厳に満ちた表情で巧みなダンスを繰り広げていた。私を含め、新任の駐在員は普段滅多に着ることのない正装に戸惑うばかりだったが、何年も赴任しているベテラン達は絶妙なセンスでドレスを着こなし、現地のスタッフから熱い眼差しを受けていた。なんとかドレスを見つけてきた私は仲良くさせてもらっているスタッフ達にサルサを教えてもらい、慣れないリズムとステップに四苦八苦しながらも、同僚達の普段見ることのできない一面を垣間見ることができ、楽しい夜を過ごすことができた。



通訳業務の中で、特に勉強になったのは品質月間のイベント通訳だ。当社は協力企業が隣接した工業団地にあり、そこでは1年に一度、品質に特化したイベントを催している。私は開催と閉幕イベントの一連の通訳を担当させてもらうことができた。ゲストには政府関係者を招待し開催の挨拶を頂くことになったのだが、即時通訳での挑戦となった。普段の業務でも即時通訳はしていたが、業務に関連することばかりのため、内容が推測でき、また分からない時はまず自分が理解できるよう説明してもらっていた。しかし、今回は自分の知らないことが多くテーマに上がり、また相手のペースで通訳をしなければならなかったため、自分の理解と言葉が追いつかず、苦しみながらの通訳となってしまった。しかし、この経験は、素早く文章の流れを読み取り、他の言語でも理解できる文章のつながりに注意して通訳する良い練習となった。

1年という短い期間ではあったが、この研修を通して、企業がどのように運営されているのか、財務経理部が社内でどのような役割を持つのかを理解する基盤を作ることができ、スペイン語力も向上させることができた。日本とメキシコでは文化や制度が異なるところもあるが、逆を言えば、その異なる環境を経験できる者は多くないと思う。この恵まれた経験を生かして、今後の業務に活かしていきたいと思う。

海外便り(新聞記事)

土屋 寛子

1996年(平成8年)卒

Tres hoteles y dos residencias se ofrecen a acoger alumnos extranjeros

Los restaurantes que se unan al proyecto crearán un menú gastronómico especial para los estudiantes de español

31.01.2016



Pérez, con una turoperadora japonesa, en Fitur. Foto **Emilio Fraile**

TANIA SUTIL Tres hoteles y las dos residencias universitarias de la capital se ofrecen a acoger a los estudiantes de español que traerá a Zamora el centro Villamor, que aspira a conseguir el sello Cervantes. El programa, que ofrecerá esta oportunidad a todos los establecimientos de hostelería, integrará también a los restaurantes de la ciudad interesados en crear menús especiales basados en la gastronomía zamorana "para difundir también la gastronomía de la tierra", explica el director del centro idiomático, José María Pérez.

El responsable de la academia ha mantenido en los últimos días una reunión con el Ayuntamiento para desarrollar toda la infraestructura necesaria para sacar adelante el proyecto y conseguir el sello de calidad. Entre el despliegue previsto está la creación de una bolsa de familias en Zamora dispuestas a acoger a los estudiantes extranjeros que acudan a la capital a estudiar español. Todos los domicilios -tanto particulares como los hoteles, hostales y residencias- estarán asentados en la capital y "estamos configurando el baremo para establecer los requisitos que deben cumplir las familias para acoger estudiantes", expone Pérez. Seis son las modalidades de alojamiento que la academia Cervantes-Villamor ofrece a los jóvenes en función de sus necesidades o capacidades económicas: hostales, hoteles, residencia universitaria, pisos compartidos con otros estudiantes del centro, apartamentos para aquellos que prefieran una estancia independiente y familias, que estarán seleccionadas minuciosamente "para que se sientan como en casa en régimen de pensión completa", añade. El centro perfila junto al Ayuntamiento todos los preparativos para la recepción de estudiantes después de su "fructífero" paso por la Feria Internacional Fitur, en Madrid, donde "hicimos muchos contactos". El director hace especial hincapié en agentes de Tokio, "muy interesados en traer turismo idiomático a Zamora". Las previsiones de la academia en el momento en que se encuentre al 100% de su rendimiento en la enseñanza del idioma pasan por lograr hasta medio centenar de estudiantes extranjeros a la semana en el horizonte de dos años, con la llegada de alumnos de Estados Unidos, Alemania, Italia y Francia, según prevé Pérez.

[土屋寛子さんは、現在マドリード在住、旅行会社 VitalSpain 社運営]

卒業してから

スペイン語からタイ語へ

江副 勇次

1974年（昭和49年）卒

卒業して43年。いわゆる前期高齢者の歳に突入。大学までの22年を1つの期間と考えるとその2倍の時間を過ごしてきたことになります。満足感というより、後悔先に立たずという反省の連続のような気がします。相変わらずのダラダラ生活を続けております。

専門学科は結構真面目に受講しましたが、一般教養とゼミの記憶があまりありません。記憶力低下、ボケ気味の年齢となりましたが、外大時代の先生・友人の名前は意外とすらすら出てきます。軽音で下手なベースだけは毎日弾いておりました。

‘72年大学3年の夏、メキシコを2ヶ月バックパック旅行。360円と思っておりましたが、ドルが308円に変わった時代でした。ノミ・ダニに悩まされた放浪旅でしたが、スペイン語の単純な会話も出来ないという事実で落胆。寄ってくるのはガキ達だけ。

メキシコからLA経由帰国の際、風邪気味だったので機内で薬を求めたら強制的に降ろされた。お金もなかったのですすがに不安で慌てふためきました。岡本公三ら赤軍によるテルアビブ空港乱射事件の直後であったので髭面・貧乏学生は不審者扱いされたのかも知れません。

イスパニア学科‘74年の卒業生の男子は少数でしたが、その内4人が帝人に入りました。“国際化”の下、就職が簡単で楽な年でした。テイジンでは輸出・海外中心の繊維営業でしたが、何度かのラテン語圏の出張はあったものの流暢なスペイン語？を活用することはありませんでした。香港3年、タイ13年の駐在。語学とは大学4年で学ぶものではなく、4ヶ月現地生活をすれば会話程度は出来るものと痛感しました。

定年を機に奈良から神戸に戻りました。そして三宮で3年前からインテリアの輸入・卸の小さな会社をやっております。30年前に知り合ったタイの親友との合弁です。



株式会社が簡単に作れる時代であり、自宅を登記先と考えましたが、妻の猛反対に合いました。海外単身生活が長かったので老後は妻の元でゆっくりと考えておりましたが、“夫源病”って知ってる？と家内からコンコンと説明を受けました。かよわき同窓生（英米学科）も今や意地悪婆さんです。結果、六甲山の麓からフラワーロード・東遊園地近くの事務所まで毎日往復1時間を徒歩通勤。緑を感じながら異人館・繁華街・オフィス街を通り、健康管理にはちょうど良い距離です。

取扱商品は、上質でデザイン力の優れたカーテンとか、椅子張り・ベッドリネンなどです。PASAYA というブランドですが、タイ語で“小悪魔”の意味があり、創造的で魅力的な商品に挑戦する趣旨を込めています。接待費使いまくりと配当生活を夢見たものの、現実には儲けることの難しさをひしひしと感じております。

それにしても日本はデフレの国です。グローバル化の結果、衣食の物価は40数年前の学生時代より安いと感じます。100円ショップ、350円の牛丼、立ち飲み、ユニクロとニトリ、……。美しい安らぎのあるインテリア空間の提供を考える当方にはアゲインストな時代です。

人生は思うようにはならずというか、誤算の連続です。まあ、それなりに楽しんでいるのが、救いかも知れませんが……。

これを機に次回の楠ヶ丘総会には初めて参加しようかと考えております。

卒業してから

¡Muchas gracias!

中澤 純一

1994年（平成6年）卒

神戸市外大とは不思議な縁がある。そもそも高校卒業後、現役で進学したのは別の私立大学だった。しかし、「何か違う」と1年生の夏休みに自主退学。再受験したのが神戸市外国語大学だった。イスパニア学科を志望したのは、バルセロナ・オリンピックとセビリア万博に行きたかったから。結局、どちらにも行くことはなかったけど、いろんな「縁」をいただいた。

まずは、「仕事」。現在、私の肩書は「株式会社デスカルガ代表取締役」、つまり、「社長」である。神戸・元町に事務所を構え、ラジオ番組の制作、CM制作などをやっている、といえど聞こえがいいが、実際のところ、事務所はワンルームマンション、社員は私の他に1人という、吹けば飛ぶような会社の経営者だ。在学中、外大生協の学生組織「文化活動企画委員会」に所属していた私は、食堂でやかましいロックを流しつつ、休講情報などを提供する放送を担当していた。今から思えば、自分で自分を張り倒したいぐらいの自分本位な内容だったが、それがきっかけで当時開局したばかりのFM局でバイトをされていた先輩から声をかけていただき、ラジオ業界に足を踏み入れることになったのだ。

ラジオの仕事と平行して、2015年4月から灘区一王山町にある十善寺というお寺の境内で「もみじ茶屋」というカフェの経営も始めた。たまたまネットで見つけた物件なのだが、よく考えてみたら外大の六甲学舎があった場所のすぐ近所。オープン時にいただいたお花に「外大 OB 一同」と書いてあるのを見つけたお客さんから「オーナーさんは外大出身やったんか！」と言われ、一気に距離が近くなった。これも外大の不思議な縁である。

学生時代はラジオの仕事にのめり込み、留年も経験したのだが、2002年に1ヶ月間、バスクのサン・セバスチャンに滞在したのがきっかけで、バスクの食や文化に興味を持つようになり、いろいろ調べるうちに竹谷先生と再会。その縁で「イスパニア会」の理事を務めさせてもらうことになった。卒業してから20年以上経ってからのほうが、外大図書館をよく利用するようになるのだから人生おもしろい。

最近、行きつけの元町のバル、「シリミリ」（オススメ！）でも、現役外大生がアルバイトをしており、ますます外大と縁深い生活となっているのだが、ひとつ大切な縁を忘れるところだった。それは、外大で知り合ってから四半世紀に渡って私を支え続けてくれている妻との縁だ。



安田謙一さんが書かれた「神戸、書いてどうなるのか」の中で弊社の活動を取りあげていただきました。もみじ茶屋でも売っています！

卒業してから

メキシコで暮らして

竹入 舞

2012年（平成24年）卒

私は、イスパニア学科をやっとのことで卒業し、1年間大阪の通関会社で働いたあと、メキシコ人の夫の出身地であるメキシコのアグアスカリエンテスに移住してきて4年目になりました。今年は子供も生まれ、てんやわんやの日々を過ごしています。

さて、私が住んでいるアグアスカリエンテスですが、メキシコを中心部に位置する、比較的治安も安定したメキシコの中で住みやすい街3位の小さな州です。また、約30年前に日産自動車が工場を構え、今では関連日系企業も進出しアメリカ及び中南米の拠点となっています。隣の州であるグアナファトにも、トヨタ、マツダ、ホンダを初めとする自動車関連の日系企業が数多く進出し、通訳・翻訳者の活躍の場が増えています。今は、日本語とスペイン語がしゃべれるというだけで（レベルが低くても…）、引く手あまたです。

私もご多聞に洩れず、自動車の変速機メーカーに通訳・翻訳者としての職をすぐ得ることができ、既に3年たちました。工場の現場や会議での通訳を初め、マニュアルや基準書などの翻訳や後輩通訳の指導を行なっています。メキシコは、世界的にも労働時間が長く、今の会社は9.5時間勤務で昼ごはんは30分という日本もびっくりの勤務時間です。ただし、比較的通勤時間は短く、私の部署は残業もほとんどないため恵まれています。また、法定の祝日が少ないため、年間を通して勤務日が多いように感じますが、職場の雰囲気は穏やかですし日本よりはストレスは少ない環境なのではないかと思えます。

通訳になってからは、学生時代になぜ勉強しなかったのだろうという後悔の日々の始まりでした。メキシコ人に面とむかって「スペイン語がわからない」と言われたこともありましたが、何回聞きなおしても、メキシコ人が何を言っているかわからないこともあります。また、上司からは文法力や作文力の不足や、スペイン語での言い回しの乏しさを指摘されました。そのため卒業してから開くこともないだろうと思い、箆笥の奥に大切にしまっていた西川先生や福島先生のテキストを日本から送ってもらい、文法を1から勉強し直しました。また、新聞や文学作品、スペイン語話者著名人のスピーチを読んだりもしています。

ふとした時に、サンス先生の授業でガチガチに緊張して発言していた自分を思い出し、当時の自分に 5 年後には何十人ものメキシコ人の前で通訳をしているということを教えてあげたくなります。

語学以上に、仕事をする上で難しい問題は、日本とメキシコの文化の違い、考え方の違いです。例えば、日本人は人前で叱ることで、カツを入れようと考えている人もいますが、メキシコではタブーで逆効果どころか大問題に発展することもあります。また、メキシコ人は長い言い訳をよくしますが、これは終身雇用というシステムがなく、何かミスをしたと発覚してしまうとクビになってしまうからかもしれません。私は、広い意味で、そういった違いによる摩擦を少なくし、コミュニケーションを円滑にすることが通訳翻訳者の役割だと考えています。まだまだ半人前ですが、語学力も向上させ、日本人とメキシコ人が本当に理解できるようになるサポートをしていきたいと思っています。

現在のイスパニア学科

講演会・公開講座の実施状況のご報告

成田 瑞穂

1996年（平成8年）卒

神戸市外国語大学イスパニア学科では、外国学研究所と連携し学外から各方面の専門家や研究者を招聘して講演会を実施しています。イスパニア学科主催のこれらの講演会は学科学生を対象としますが、一部、一般聴衆の参加も受け付けています。

今回は2015年度から最近までのイスパニア学科主催の講演会について、さらに学科の地域貢献活動として行われた2016年度市民講座についてご報告します。

1. イスパニア学科主催の講演会（開催日時順）

- 「アドルフォ・ビオイ＝カサーレスと日本文化」（2015年6月）
講師：José Amícola 先生（ラ・プラタ大学，アルゼンチン）
- “La vida secreta de las palabras”（2015年10月）
講師：Itziar Laka 先生（バスク大学，スペイン）
- 「ヨーロッパ中心主義への批判とラテンアメリカにおける新興思想」（2016年5月）
講師：Damián Pachón Soto 先生（サント・トマス大学，コロンビア）
- 「メキシコの対日外交：通訳の視点で語る36年の歴史」（2016年7月）
講師：三好 勝先生（駐日メキシコ大使館 翻訳官）
- “Relaciones España-Japón: presente y futuro”（2016年12月）
講師：Gonzalo de Benito Secades 閣下（駐日スペイン大使）

直近2年間においては、文学、言語学、哲学、翻訳学、経済学と幅広い分野での講演を年間2～3回の頻度で開催し、学生の知見を広げる機会を得ることができました。学生のスペイン語習得への意識向上を目的として、スペイン語圏からの研究者の講演は通訳なし、すべてスペイン語で行われました。低年次生には難しいだろうと予想されましたが、どの講演においても1、2年生を含め多くの学生から質問が寄せられました。講演内容を踏まえた興味深い質問もあり、学生のスペイン語習得度の高さに驚かされることもありました。

学外からゲストを招聘して講演会を実施する際には、専攻語学の授業を振り替える形を取っています。すべての学生が確実に出席できるのが利点である一方、講演会の実施できる曜限に柔軟性が持たせられないという問題点もあり、改善の方法を考えていく必要があるかもしれません。また、海外から直接研究者を招聘できるような予算の確保も課題の一つと言えるでしょう。いずれにしても、学外ゲストによる講演会は学生にも好評を得ている活動ですので、今後も引き続き実施していきたいと考えています。

2. 日本イスパニヤ学会 第 62 回大会記念講演

2016 年 10 月、本学で日本イスパニヤ学会、第 62 回大会が開催されました。大会開催校として多岐にわたる作業がありましたが、実行委員長である福嶋教隆先生の指導のもと、学部・院の学生アルバイトのみなさんの素晴らしい働きで無事終了することができました。この大会は神戸市外国語大学創立 70 周年冠事業としても開催され、プログラムのうち記念講演は一般聴衆にも公開されました。

記念講演は、木村榮一先生（本学名誉教授）、東谷穎人先生（本学名誉教授）のお二人にご登壇いただき、それぞれ「ラテンアメリカ文学との出会い」、「私のスペイン文学読書遍歴」というタイトルでご講演いただきました。学会員のほか多くの一般聴衆のみなさんにもご参加いただき、おかげさまで開催校として、外大らしい学会が実施できました。厚く御礼申し上げます。

3. 2016 年度市民講座

神戸市外国語大学では毎年、地域貢献の一環として公開講座のシリーズを企画・開催しています。語学講座の「オープン・セミナー」のほかに、それぞれの教員の専門分野に関する講義をリレー形式で行う「市民講座」があります。2016 年度はイスパニア学科が公開講座の担当になり、「スペイン語で巡る世界遺産の旅」という共通テーマでスペインとラテンアメリカの世界遺産を様々な切り口から概説する講義を行いました。

2016 年 9 月から 10 月にかけて実施された本講座には、名誉教授である西川喬先生、宮本正美先生、さらに客員研究員の吉田浩美先生にもご担当いただき、非常に充実した講座内容になりました。世界遺産というテーマと豪華な講師陣が揃ったためか、毎回 100 名を超す聴講生があり、市民講座が始まって以来の大盛況となりました。聴講生によるアンケートも好意的な意見が非常に多くありました。この市民講座は、教員がどのような研究をおこなっているかを一般

のみなさまにご理解いただく良い機会となっており、大学の地域貢献として非常に有意義なものであると再認識しました。

イスパニア学科では、今後もこのような講演会・地域貢献企画を実施していきたいと考えております。

ラテンアメリカ・フォーラム

「ラテンアメリカ・フォーラム」の今後について

谷 善三

1967年（昭和42年）卒

母校で「ラテンアメリカ・フォーラム」を立ち上げたのは2014年11月で、早いもので2年が経つ。この間7回の「ラテンアメリカ・フォーラム」を実施してきた。これまで実施したフォーラムのテーマ、時期、講師を列挙してみる。

- | | |
|---|-------------|
| 第1回：ラテンアメリカ・カリブ地域の概要 | 2014年11月19日 |
| 発起人4名が講師：小西諄次（英米学科昭和39年卒）、伊藤嘉太郎（昭和41年卒）、谷善三（42年卒）、齋藤仁（50年卒）（年齢順、敬称略、小西氏以外は全てイスパニア学科卒） | |
| 第2回：メキシコ、パナマのビジネス事情 | 2015年1月14日 |
| 講師：伊藤嘉太郎、谷善三、齋藤仁 | |
| 第3回：南米最大の国ブラジルのパワーを知ろう | 2015年6月3日 |
| 講師：杉井皓一（41年卒）内田雅夫（46年卒） | |
| 第4回：私の海外勤務経験と後輩たちへ伝えたいこと | 2015年10月28日 |
| 講師：池澤英一（44年卒） | |
| 第5回：ある商社マンのラテンアメリカの青春 | 2016年1月27日 |
| 講師：柴野元秀（45年卒） | |
| 第6回：ラテンアメリカ駐在業務体験より | 2016年6月1日 |
| 講師：中村俊昭（41年卒） | |
| 第7回：魅力に溢れた中南米 | 2016年10月12日 |
| 講師：吉田尤彦（44年卒） | |

私は予てより外大生は文学などアカデミックな分野以外では、語学を活用して「地域の専門家」になることを目指すべきであると考えている。その為に母校に「中南米の政治・経済」の講座を設けて欲しいと強く望んでいる。講座開設が実現できるまで、本学の卒業生OBで中南米に駐在経験のある方に駐在の体験を語ってもらい、現役学生に中南米に関心をもっと持ってもらうきっかけを作りたいと、大学の先生方の理解と協力を得て進めてきた。

しかし 2 年間続けていても、学生の出席者数が増えないことに加え、話をし
て頂ける OB を探すことが難しくなっていることに焦りを感じている。

今の時代、学生は自分がその気になれば、中南米の情報は日本にいな
ぐらでもインターネットなどで入手できるし、スペイン語のネイティブも身近
に沢山いて情報源は多くある。従い、わざわざ時間を束縛されてフォーラムに
出席する気になれないのではないか。他の理由としてフォーラムに出席しても
単位はもらえないこと、部活、アルバイトで時間的余裕が無いことなどが考え
られる。

しかしながら学生にとって、同じ大学 OB の方々の生の体験談、アドバイスや、
それに質疑応答は、インターネットなどでは得られない感動と影響力があると、
確信している。

そこで OB の方をお願いしたい。ご自分の経験を振り返り、後輩に語り掛ける
ことは、ご自分にとっても大変意義を感じてもらえると思う。

どうか OB の皆さまも講師になることで、「在校生と卒業生との交流の場」でも
あるこのフォーラムの盛り上げにご協力をお願いしたい。

これまで講師をして頂いた方に、感想やご意見を寄せてもらったので、原文
のまま紹介させていただきます。

☆小西 諄次氏

「ラテンアメリカ・フォーラム」の今後に寄せて

第 1 回の講師として参加してから 2 年が経った。イスパニア学科設立から半
世紀が過ぎ、フォーラムの創設に些か関与した者としての感想を申し上げるな
ら、最近の神戸外大では女子学生の増加は女子の能力が優れているからであ
ろうが、男子学生の海外赴任への関心減退は見過ごせない。卒業生が世界を舞
台に活躍する一助となるようフォーラムを発展させるために大学側の更なる積極
性が求められると共に、最近のラテンアメリカ事情に精通した講師を起用す
ることが期待され、このためには最近の駐在経験がある若手の講師が積極的に手
をあげてくれることを期待したい。



☆齋藤 仁氏

私は第1回と第2回のフォーラムに参加させて頂きましたが、現役学生にとっても、話す側にとっても非常に興味深い、有意義な集まりであったと感じています。

我々が駐在していたラテンアメリカの最近の情報を我々自身が細かく再確認することが出来ましたし、駐在した者にしかわからない現場での種々の経験や自分が感じたことなどを直接後輩の学生諸君に伝える機会が設けられたのは非常に有意義なことであったと思います。この感覚を学生諸君が共有できればいいのですが。

今後、可能であれば、例えば中南米の在日本大使館関係者や在ラ米公館勤務経験者などを外大に招待し、講演会等を企画できれば面白いと思います。

☆杉井 皓一氏

「第3回ラテンアメリカ・フォーラム」の感想

中南米駐在経験OBの体験談を現役学生に話して関心を持って貰うというラテンアメリカフォーラムの趣旨に賛同して非スペイン語圏ながら中南米最大規模の国土、人口、経済規模を有するブラジルの政治経済の歴史と現状を話しまし

た。 駐在時代から年数を経た最近の情勢はネットや現地の友人からの情報に依存せざるを得ず、質問に備えて種々資料準備には時間が掛りましたが私にも勉強になりました。 プロジェクターを使って写真やグラフなどを見せたのも良かったと思っています。

就活中の学生諸君にとってOBから直接体験談や現地情報を聞けることには関心があるだろうと思っておりましたが、出席学生が少なかったのが意外で政治経済に関する質問も殆どありませんでした。

アンケート用紙を準備しておいてフォーラム終了後に出席学生に感想とか今後の希望課題や出席者を増やす手段などを聞いて見ては如何でしょうか。 また講義という形式では質問し難いのであればもっとくだけた雰囲気でお互いに話し合いが出来る形式とか、或いは中南米にこだわらずに海外駐在経験者とか貿易実務経験者との話し合いの場という形式も必要かも知れませんね。



☆内田 雅夫氏

「ラテンアメリカ・フォーラム」の感想

第3回(03/06/15)ブラジルのパワーを知ろう、のなかで話しました。気軽に聞いてもらいたいと思って、VILLANCICOS POPULARES を切り口にして話

ました。昭和 42 年、私が 1 年生のときにアルバレス先生に教えてもらった歌々の美しい旋律を今の若いひとにも知ってほしかったからです。

中南米駐在員生活で、スペイン語圏とポルトガル語圏の違いを感じてきました。その一つがクリスマスの子供たちの歌う VILLANCICOS でした。パナマ近辺のスペイン語圏には、伝統のクリスマスがあり、アルバレス先生の言われた *Allí conservan tradición hispánica* を実感しました。

ところがブラジルにはこのような伝統に基づく VILLANCICOS は歌われていません。同じラテン、同じカトリックでもこうも違うことを学生諸君に言いたかったものです。

気軽に、ということで、*Alegría, alegría, alegría* という歌をフォーラム会場で歌ってみました。簡単な子供の歌なので一緒に歌ってくれるひとも出てきてそれは良かったと思います。こんな美しい歌があるのだ、ベサメムーチョだけではないのだということは伝わったのではないかと思います。

ブラジルのパワーとは関連するのかは次回以降の課題です。

☆池澤 英一氏

「ラテンアメリカ・フォーラム」についての感想

今年の 6 月 4 日に外大設立 70 周年の記念パーティーに出席した折、見知らぬ若い女性 2 人に声を掛けられました。聞けば兩人とも私が担当していた英米学科の学生対象の第二外国語としてのイスパニア語の授業を受けたとのこと。彼女たちは私の授業について、「イスパニア語は忘れましたが先生の雑談がおもしろかったので授業に出るのが楽しみでした・・・」と語ってくれました。どのような話をしたのかよく覚えていませんが、私は海外勤務を通じて、「外国人とその文化」がいかに「日本人と日本文化」と違うか身をもって経験しました。そして日本人とその文化が優れてユニークで素晴らしいものだ確信していたので授業中そのことを体験談も交えてよく話しました。だからそのことを覚えていてくれたのではないかと思います。

従って、今後の「フォーラム」について一度学生諸君に先輩諸氏から話を聞くとしたら、どのようなことに一番関心があるか調査してもらってはいかがでしょうか？ そして興味のあるテーマに絞って講師が話をすることにすれば盛り上がるのではないかと思います。

☆柴野 元秀氏

2016年1月27日(水)第5回ラテンアメリカ・フォーラムに「ある商社マンのラテンアメリカの青春」と題して講師を務めさせていただきました。希望に溢れた若い人たちの前で自分のかつての経験を語る機会を与えられたことは本当に嬉しいことでした。今レジュメを読み返してみても、日本の高度成長期に自分の夢がかなってラテンアメリカの国々と深く関わりあった頃が熱く蘇ってきました。まだ海外への旅行、出張、駐在が珍しい頃でした。インターネットもメールもない時代でした。海外店との交信はテレックスが大動脈で、新入社員の頃は毎晩深夜までテレックスと格闘していました。駐在地のメキシコ、パナマを中心に巡回出張で駆け巡った中南米各地での思い出や失敗談を若いみなさんにお話しいたしました。真剣に耳を傾けていただき、終了後も次から次へと質問を受けました。

50年ぶりの東京オリンピックが近づき、グローバル化はますます進みます。語学力と幅広い国際知識のある外大生に対する期待はますます大きなものがあります。しっかり基本を学び、世界で活躍してほしいものです。フォーラムの講師を務めた時点では結果待ちの状況であった国家資格「通訳案内士試験スペイン語」はその後何とか合格通知が届き、今春より英語と合わせ、二本立てで奈良京都大阪を中心に外国人旅行者を相手に通訳ガイドを務めています。また同時にJICA(国際協力機構)と歴史街道推進協議会が連携して途上国からの研修員向けに提供している英語の講座「日本の歴史と文化」の講師も務めています。若い皆様に負けないようにまだまだ頑張りたいと思います。



☆中村 俊昭氏

「第6回ラテンアメリカ・フォーラム」に参加して

2016.6.1 開催のフォーラムに参加しました。正しくは同期の伊藤嘉太郎さんと2期の谷善三さん御両名の後輩や神戸外大に対する熱い想いに打たれて、これまで卒業後間もなく海外勤務が続き母校訪問も卒年度夏の園遊会を除き完全にご無沙汰していたので、せめて中南米勤務の実務体験を後輩の皆さんにお話して少しでもお役に立てたらと思って引き受けました。今年は奇しくも西班牙(イスパニア)学科一期生として卒業してから丁度半世紀の区切りで、これも何かのご縁でしょうか。しかし引き受けたものの退職後は完全に現役時代の世界から無縁だったので自分の中南米勤務当時を振り返りながら、初めてのパナマ駐在から最後は定年を迎えた二度目のメキシコ駐在までの実務体験を話させてもらいました。十数名の学生諸君がフォーラムに参加されましたが数十年前の私の拙い話を聞いてもらいました。それでも海外駐在での仕事の一端を聞いて何らかの参考にして貰えればと思います。その後今回のフォーラムの間接的なご縁で、私が勤務した会社に就活していた一人の後輩から内定との嬉しい知らせがありました。

最後に今後最近の情報を提供できる若手の駐在経験者に是非ともフォーラムに参加して頂きたいと思います。

またフォーラムとは直接関係ありませんが、現地で労働許可等の諸手続きの中で学歴証明などで外大の卒業証書写しを翻訳と共に提出するような場合がありますから、現在は如何か知りませんが日本語だけでなく英文併記の卒業証書ならばと痛感しました。

☆吉田 尤彦氏

講師の依頼を引き受けて以来、思い続けたことは「学生はどのような内容に興味を持つか」と言う事だった。数十年前の記憶を辿りながら講演の原稿を作った。7枚にもなったその原稿は仕事の足跡を示した小生の貴重な財産になった。仕事を通しての中南米との関わりから「小生が得たもの」に学生が興味を持ち、

もっと多くの質問や、意見交換をしたかったと言う残念な思いはあった。しかし、これを機に学生が中南米に関心を持ってくれれば幸いと思う。

学生の海外体験記

サラマンカ大学留学体験

木村 賢弘
イスパニア学科4年

このような場所で留学体験談を書かせていただける機会を与えてくださった先生方に感謝させていただきたく思います。私は2015年9月から2016年6月まで交換留学生として、スペイン、サラマンカ大学に派遣させていただきました。留学中には、ビザの問題があったり、履修ができなかったりなど、書きたいことは多くあるのですが、交換留学をさせていただいたので、スペインでの学業について書かせていただきたいと思います。

先にも書きましたとおり、スペインでは言語学を中心に勉強していました。日本でのゼミでの専門分野が言語学だったこともあり、授業については全く心配していませんでした。ところが、実際授業が始まってみると、なかなか話すスピードについていけず、苦しみました。自分が思っていたよりもできなかったことに大変落ち込んだのですが、悔しさをバネに頑張ろうと思い、「全授業で **notable** 以上を取る」という目標を立てました。毎日、朝の9時から一人で図書館に行き、昼から授業を受け、20時まで図書館で勉強するというのが日課でした。そんな生活を毎日続けていたので、もちろんストレスもたまり、勉強が少し嫌になってきていました。

そんなある日、クラスの友人のアルゼンチン人が遊びに誘ってくれ、何人かのクラスメイトと飲みに行きました。そこで、クラスメイトたちに「毎日なにをしているの？」と聞かれ、「図書館に行っている」と言うと、とても驚かれ、感心されました。その次の日の朝に、クラスメイトから「一緒に図書館に行ってもいいか？」とメッセージが届きました。それから、何人かのクラスメイトと図書館で一緒に勉強するようになりました。授業での解らないことをお互いに聞きあったり、休憩中にくだらない話をしたり、以前よりも勉強を楽しめるようになりました。図書館に行くのに、友人が付いて来るだけでなく、私が彼らに付いて行き、一緒に遊ぶことも増えました。学期末のテスト前には、友人たちと共に勉強会を開いたり、24時間開いている図書館で、徹夜で勉強したりもしました。

結果的には、全授業で **notable** 以上を取ることができ、目標を達成しました。しかし、目標を達成したという結果以上に、友人たちと共に学び、遊んだ時間

は本当にかげがえのない経験になりました。また、この経験がなければ、目標は達成できなかつたと思っています。

最後になりましたが、交換留学の機会を与えてくださったイスパニア学科の先生方、また、留学期間中にサポートしてくださったイスパニア学科の先輩方に心からお礼を申し上げます。

第 67 回語劇祭

イスパニア学科・語劇祭について

清水 悠佑

イスパニア学科 4 年

作品名：*Los árboles mueren de pie*（邦訳：『立ち枯れ』）

作者：Alejandro Casona

作者紹介：1903 年にスペインのアストゥリアス地方で生まれ、1934 年に『陸に上がった人魚（原題：*La sirena varada*）』でロペ・デ・ベガ賞を受賞し劇作家となる。内戦時にアルゼンチンに亡命し『漁夫なき漁船（原題：*La barca sin pescador*）』や『暁に訪れる女（原題：*La dama del alba*）』などを書く。「愛と死」「空想と現実」をテーマとした作品が多く、昨年上演の『漁夫なき漁船』及び今年度の『立ち枯れ』では空想に逃げる人々が残酷な現実にあの力で立ち向かう姿が描かれている。

第 67 回目となる語劇祭が 12 月 3 日・4 日、神戸アートビレッジセンターにて行われました。イスパニア語劇団の今年度の演目はアレハンドロ・カソーナの『立ち枯れ』（原題：*Los árboles mueren de pie*）。2007 年以来 9 年ぶりの再演となります。

「人生に絶望した少女マルタと、悩みを抱えた老父バルボア氏。ふたりがやってきたのは、運命に見放された人々を空想によって救う研究所であった。最愛の孫が家出してからずっと心を閉ざしたままのバルボア氏の妻。所長の計画のもと、彼女を救うための芝居が繰り返されていく・・・」というのが本編のあらすじ。空想と現実、相反するものの中に揺れ動く主人公たちを描いたこの作品を、総勢 29 名が 6 つの部署にわかれて作り上げました。

たった 1 シーン、たった 2 分のために何日も何時間もかけて練習する者もいれば、何シーンにもわたる膨大な量の台詞と動きを繰り返して身体にしみこませる役者もいます。何千何万とある曲の中から劇に合うごく一部の音をひたすら探し続ける音響。2 時間の間、シーンごとに刻々と変化する役者の心情や場の雰囲気、合う照明効果を考え抜き、ひたすら色合いの調整を重ねる照明。たった 2 行のスライドに膨大な量の情報を詰め込み、それを 2000 枚弱作成する字幕。設計から作成までをすべて自分たちで行い、劇に合う舞台を作る大道具。小道

具の作成からキャラに合わせたメイク、衣装作りに至るまですべてを行う小道具。そしてこれらすべてを部署・劇団員を束ねる演出・監督。ある日曜日のたった2時間の為にすべての部署が日々たゆまぬ努力を続けてきました。



こちらはリハーサルでの1枚。一家でピアノを囲んで歌うシーン。「温かみのある雰囲気」を照明・大道具・衣装が作り出し、陽気な音楽に合わせて役者が歌い、字幕が観客に歌詞を伝える。すべての部署が一つになって作り上げたこの一場面で、祖母の家本来の温もりと明るさが戻っていく様子をお客様に十分に伝えることができたのではないかと思います。

去年は優秀劇団賞という結果に終わり、「2番手」にしか成りえなかった自分たちの力不足に悔し涙を流しました。それ故に、今年度の劇にこもる熱は例年以上のものでしたし、劇団員一同「今年こそは」という1つの思いを抱いて日々練習を重ねてきました。その結果出来上がった劇は自分たちでも満足のもので、お客様からのアンケートでもお褒めの言葉をたくさんいただきました。中にはここ数年で最高の出来と言ってくくださる方もいて、昨年度辛酸をなめた身としては胸にこみ上げてくるものがありました。

審査結果としましては、音響・舞台美術・衣装メイクがそれぞれ各部門賞を獲得し、役者は祖父バルボアが審査員特別賞を、祖母エウヘニアがなんと最優秀女優賞とベストキャラクター賞をそれぞれ授与され、夫婦で表彰される形となりました。そして劇団としては見事最優秀劇団賞に輝き、去年の雪辱を晴らすことに成功しました。

最後になりましたが、時折練習に顔を出し、発音指導や意味の解釈を手伝っ

てくださった先生方、OB・OGの皆さま、語劇祭実行委員会の皆さま、本当にありがとうございました。来年度は役者も裏方も世代交代の年になる見込みです。新たなイスパニア語劇団がどのような風を起こすのか、どのような劇が出来上がるのか、楽しみにしていただければと思います。



最優秀主演女優賞を獲った学生　イスパニア学科2年　仁ノ内詩穂

同期会

1、2期生合同同窓会報告

伊藤 明
1966年（昭和41年）卒

2016年11月5日（土）午後1時から1期生の復活同期会を開催しました。ご招待していた恩師鼓直先生が風邪で急きょ欠席されたのが残念でしたが、前回同様2期生有志の方々も参加いただき総勢18名が懐かしの六甲に集まりました。

今年は1期生が卒業してちょうど50年となり、外大の旧キャンパスに近い阪急六甲駅前の中華料理「六甲苑」で開催。今回は皆さんから近況報告というよりも卒業以来のそれぞれの往時の活躍の話などを詳しく伺いました。中でも今は亡き高橋正武先生とのとっておきの話もご披露され、いたく感銘を受けました。とても賑やかな楽しい3時間でした。その後の2次会にも有志の方に参加いただいて、また2年後の再会を期して散会となりました。やはり外大の仲間は最高です！ **Muchas Gracias!**

幹事 伊藤 明



新旧学舎

神戸外大跡地訪問

杉井 皓一

1966年（昭和41年）卒

2016年11月5日に同期会が阪急六甲駅前で開催されたのを機に早目に着いて母校跡地を見て来ました。阪神大震災後に新築された住宅やビルが多く当時の街並みよりずっときれいになったと感じましたが、高羽交差点には地獄坂へ連なる大きな歩道橋が出来ていて驚きました。地獄坂の急坂は以前のままですが、母校の跡地には親和学園中学・高校が移転して新築校舎になっており以前の建物は全く残っていません。図書館跡地はマンションになっています。唯一似通っているのは正門の階段ぐらいでしょうか。卒業前の合同写真と見較べてみてください。





会員の近況報告

荒川 弘道 1967年（昭和42年）卒

スペイン語を学んだ者にとっては一度はスペインに行きサグラダファミリアやアルハンブラ宮殿、プラド美術館、サンティアゴ・デ・コンポステーラなどは是非訪れたいと思うものです。私は特に美術が好きなのでプラド美術館には常々ゆっくり訪ねたいと思っていますが持病の腰痛が長旅に耐えられるか心配でまだ実現していません。

そんな中、最近発見したのは徳島にある大塚国際美術館です。世界の名画が原寸大の陶板複製画で本物そっくりに再現展示されているのです。勿論ゴヤ、グレコ、ベラスケス、ピカソ、ダリの名画が迫力満点で見れますし、満足感は結構高いです。美術好きな方は一度訪問することをお勧めします。

竹谷 和之 1979年（昭和54年）卒

イスパニア学科を卒業後、体育教員として母校に戻りはや33年が経過しました。いったんはスペイン語を捨てたのですが、その毒の強さゆえか、現在はスペイン・バスク伝統スポーツ文化調査のため毎年サン・セバスティアンなどに通っています。バスクと言えば美食で有名で、友人宅の部屋を拠点にして、チャコリ（白ワイン）を嗜みながら旨いモノ探しにも余念がありません。こちらに来ないかという誘いに心をくすぐられ、それも良いかと本気で考え始めています。

石田 敦子（旧姓：小坂）

1984年（昭和59年）卒



外大校庭での写真

現在、兵庫県の機関で女性の就業支援に携わり、セミナーの企画・広報等の仕事をしています。先日、70周年記念行事の「旧外大学舎バスツアー」に旧友5名と参加しました。周囲の環境や校舎は、すっかり変わりましたが、校庭を散歩すると、懐かしい思いが込み上げてきました。スペイン語からは長年離れていましたが、昨年秋から30年ぶりに勉強を再開。動詞の活用に苦労するものの、とても新鮮な気持ちで学んでいます。

吉田 昌洪 1994年（平成6年）卒

卒業後タイに渡り、社長として社会人デビュー（社員はタイ人1名）。13年間抗うも競争原理にあっさり敗れ失意の帰国。その後、超有名企業で華麗にサラリーマンデビューを果たすも、自分の心が経営破綻。昔の知人を頼って福岡で再就職したその年に、海外滞在200日以上・渡航国数20カ国以上・平均残業時間100時間以上のブラックトリプル3を達成。4年前に地元大阪にUターンし、現在も日本生活のリハビリに励んでいます。この波乱万丈な経歴の道連れはイスパの同級生。写真は1+1=4人家族になって母校凱旋！



遠藤 あづさ (旧姓：中本) 1995年(平成7年)卒

4回生の時に阪神大震災があり、しばらく避難生活をした後、地元の米子市へ戻りました。こちらでは、山や海でのアクティビティを存分に満喫しています。二人の子どもは共にバレーボール三昧で、母として週の半分以上体育館に通う日々がもう6年目に突入しました。スペイン語を使う機会は皆無なので、ワールドニュースや福嶋先生のラジオを聞いて、西語を忘れまいとあがいています。イスパの同級生や水泳部OBの集まりがあると聞くと神戸へすっ飛んで行きます。

竹内 縁 (旧姓：先川) 1995年(平成7年)卒

結婚と同時に外大のある神戸市西区のお隣の三木市に住んで15年。すっかりスペイン語とは縁のない生活を送っています。今ではスペイン語で1から10まで数を数えるだけで息子に尊敬されてしまう始末ですが、いつかは家族でスペイン旅行に行ったらちょっとは昔の勉強も役に立つ(と思いたい)ところを見せるのが目下の目標です。

田中 大輔 1995年(平成7年)卒

お会いしてない方々、ご無沙汰しております。卒業後、就職用語でいう「娯楽業」に分類されるボートレースの仕事に就き20年余、職場は住之江→尼崎→梅田と関西一筋、生活は(飼い)犬中心です。海外へは観光のみ、妻の海外出張には感心しきりで、外大及びスペイン語とは99%縁がありませんが、尼崎勤務のときII部の先輩がおられ、とてもうれしかったです。在籍時から向学心の欠片もない私ですが、本屋でラテンアメリカ文学のコーナーに足が向くのはイスパの端くれだったレガシーでしょうか。

長本 拓人 1995年(平成7年)卒



阪神大震災直後の混乱の中、卒業し、上京し、商社に就職しました。当初は社会に馴染めず、苦勞しました。数年後、南米へ飛ばされました。そこで、大学時代にはダントツの落ちこぼれでしたが、それでもスペイン語を学んだことに救われました。その後、名古屋、東京間をピンボールの様に引越しし、今は東京で暮らしています。大学時代と変わらず、今も水泳をやっています。タイムは落ちるばかりです。

別所 雅美 (旧姓：山角) 1995年(平成7年)卒

大阪の編集プロダクションに4年勤務、その後、印刷会社でコピーライターを6年間していました。フォークソング部で一緒だった同級生(英米学科)と結婚、現在、小学生と中学生の野球少年を2人育てております。外国語を使う機会といえば、スタッフとして勤務している公文式教室で英語を指導するときぐらい。在学中に1ヶ月間スペインを旅行しましたが、そんなことができた自由な大学生活を懐かしく思いつつ、いつか家族でメキシコへでも旅行して、スペイン語を息子らの前で披露できたらなと思います。

大森 圭子 2009年（平成21年）卒

卒業後は商社に就職し東京に住んでいます。東京に住んでもう8年が経とうとしていますが、多くの新しい友人ができて楽しく過ごしています。私のスペイン通は友人たちの間でも有名です。今年のスペイン一人旅では、チェコに旅行した際に友達になったスペイン人カップルの家にお邪魔させてもらったり、留学していたトレドを再訪したりしました。また近いうちに訪れたいものです。



神戸外大に留学していた Damaso が友達を連れて東京に来てくれました。スペインバルでの夕食の写真。

柴田 沙希 2015年（平成27年）卒

今日も仕事帰りにスペインバルへ行きました。社会人になり2年が経とうとしています。現在は旅行会社で、海外旅行を提案する仕事をしています。まだまだ未熟ですが、新婚旅行や家族旅行、学生旅行など、様々な目的で海外に行く方とお話すること、旅のアドバイスをさせてもらえることを、とてもしあわせに感じています。特にスペイン語圏の話をするときは、外大の先生方の授業を思い出します。これからも好きなことに全力で、努力を惜しまず邁進したいと思います。

中土井 未奈 2015年（平成27年）卒

皆さま、はじめまして。2015年卒の中土井未奈と申します。私は今、スペイン語も何も関係のない、インドネシアはジャカルタにて働いております。9月末で新卒入社した会社を退職し、心機一転こちらにやってきました。4ヶ国語目を習得中、と言いたいところですが、スペイン語は全く使わず絶滅寸前、英語はインドネシア訛りに、そしてインドネシア語はなかなか入ってこないという悲惨な状況でございます。が、何とか頑張っていきたいと思っております。

長屋 いより 2015年（平成27年）卒

神戸市外国語大学を卒業してはや1年半がたちました。イギリスの大学院への進学を選んだ私は今、人生最後になるであろう長い休暇を謳歌しています。ラテンアメリカについて研究したこと、そして今の内定先に決まったこと、これらすべてはイスパニア学科で過ごした4年間で私にどれほどの影響を与えたかを示しているのではないかと思います。大学院進学にあたってご助力していただいた成田先生をはじめ、イスパニア学科の先生方のもとで学べたことを誇りに思います。

寺田 和香 2016年（平成28年）卒

電子部品を扱う商社で働き始めました。世界中のお客様の要望にタイムリーに対応できるよう、時差と戦う毎日です。憧れていたグローバルな仕事ですが、泥臭い業務も多く、日々奮闘中。一方で、仕事終わりに外大の卒業生達と呑みに行くなど社会人生活を満喫しております。友人達と話していて感じるのは、皆パワフルとだということ。それぞれ新しい環境で、苦労しながらもしぶとく生きていけるのは外大生ならではの感覚です。

神戸外大イスパニア会 役員名簿

2012年06月02日

2015年05月23日

2016年05月28日

会 長	西川 喬	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
副会長	谷 善三	(16回)	昭和42年(1967年)卒業
副会長	佐藤 孝三	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
理事長	竹谷 和之	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
常任理事	田尻 陽一	(15回)	昭和41年(1966年)卒業
	坂根 博	(21回)	昭和47年(1972年)卒業
	安藤 典子	(26回)	昭和52年(1977年)卒業
	富尾 圭子	(28回)	昭和54年(1979年)卒業
	小野 賢一	(30回)	昭和56年(1981年)卒業
	野村 竜仁	(41回)	平成 4年(1992年)卒業
	成田 瑞穂	(45回)	平成 8年(1996年)卒業
	飯島 祐子	(47回)	平成10年(1998年)卒業

理 事

池沢 英一	(18回)	昭和44年(1969年)卒業
柴野 元秀	(19回)	昭和45年(1970年)卒業
内田 雅夫	(20回)	昭和46年(1971年)卒業
増野 俊則	(22回)	昭和48年(1973年)卒業
和久田 好男	(23回)	昭和49年(1974年)卒業
齋藤 仁	(24回)	昭和50年(1975年)卒業
田岡 敬造	(25回)	昭和51年(1976年)卒業
松久 恵美子	(31回)	昭和57年(1982年)卒業
塩川 雅美	(32回)	昭和58年(1983年)卒業
石田 敦子	(33回)	昭和59年(1984年)卒業
伊藤 卓郎	(35回)	昭和61年(1986年)卒業
中澤 純一	(43回)	平成 6年(1994年)卒業

吉田 昌洪 (43回) 平成 6年 (1994年) 卒業
伊藤 かお里 (44回) 平成 7年 (1995年) 卒業

監 事 松田 侑子 (53回) 平成16年 (2004年) 卒業
森川 香織 (53回) 平成16年 (2004年) 卒業

「会員の近況報告」に関する投稿規定

2015年3月
2016年2月改定

1. できるだけ、「ワード」で書いた原稿とすること。
2. 原則として、200字程度とする。
3. 文字サイズは12、字体はMS明朝体とする。ただし、この字体がなければ、他の字体でもかまわない。
4. メール添付で送付のこと。メールは、同学年の理事またはそれ以外の理事に送付すること。
5. 写真を提供することができる。ただし原則として、本人が写っているもので、1枚限りとする。なお、写真の掲載の可否およびそのサイズに関しては編集委員会に一任するものとする。
6. メールアドレスは原則として掲載しない。しかし、本人が希望すれば、掲載することができるので、その旨を明記すること。

編集後記

おかげさまで「イスパニア会」会報発行も、今回で第4号を迎えることができました。

今回は新企画として、外大70周年記念（イスパニア学科54周年）関連の記事も掲載され、号を追う毎に皆様の原稿内容も多岐にわたり、掲載写真も充実してきて、遥か異郷の地で活躍しておられる姿が、とても身近に感じることができるようになりました。

今回も原稿をお寄せいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

この会報が、皆様の親睦をますます深め、さらに強い絆を育てる上で少しでもお役に立てればと願っています。

引き続き皆様の投稿と近況をお知らせいただければ幸いです。

会報編集委員

西川 喬

伊藤 かお里

吉田 昌洪

田岡 敬造（記）

イスパニア会 会報 第4号

神戸市外国語大学イスパニア学科
イスパニア会

イスパニア会会報 第4号
2017年3月31日 発行
発行者 会長 西川 喬
発行所 イシダ印刷株式会社
